

長崎縣の人口分布

圖版第五版付

森 壽 美 衛

一、概 觀

大正十四年國勢調査の結果によれば本縣の人口は總數一、一六三、九四五人で、内地總人口の約五〇分の一、行政區劃の府縣別から見れば第二〇に位し、東京府（四四九萬）の四分の一、福岡縣（二三〇萬）の二分の一に當る。又人口密度は一方里につき四、三六一人であるから内地平均（二、四一七人）の二倍、近畿地方と同じ位であつて府縣別に密度の大なるものより數ふれば第一〇位である。東京（三二、二八九人）大阪（二六、四九三人）福岡（七、二一三人）等に比すれば遙に遜色はあるものゝ我國開化地帶の一部として人口は割合に密な部類に屬する。先年出版された小野學士編の大日本郡市別人口密度圖によつて見てもそれは明かである。

しかし本縣は人口の多い割合には活氣に乏し

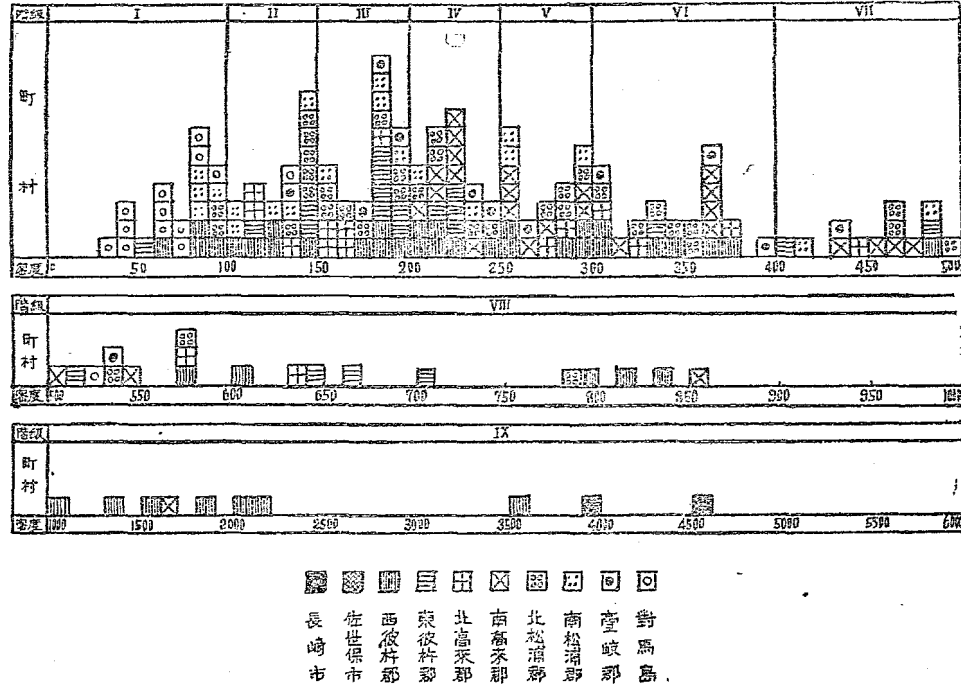
い地方である。一一六萬の縣人は他の文化地帶の同じ數の人口の能率は上げ得てゐないと觀察される。増加の率も案外少い。本縣の位置が西に邊して中央との連絡に長時間を要し、丘陵性半島島嶼は生産に乏しく且交通不便等自然の恩恵は氣候の他には少いのが發展を阻害する原因であらうが、一般住民が又積極的に振興を計る氣風も足らないかの感がある。

二、人口密度圖

人口の分布現象は地理研究上ばかりでなく政治上・經濟上其他にも極めて重要であることは今更言ふまでもないことである。地方的の人口現象に就ては本誌にもすでに中村學士の朝鮮の人口とその分布（第三卷）、金尾氏の福岡縣の人口地理（第七卷）、春日氏の長野縣に於ける人口現象の一端に就いて（第十卷）等の記載あり、其

第

圖



長崎縣の人口分布

他朝鮮總督府の朝鮮の人口現象等大冊の單行出版物等もありて我等の大いに啓發される所があつた。小野學士編大日本郡市別人口密度圖及同表の石橋博士、小野學士の解説は特に人口分布圖に關する智識を與へられたる貴重なるものとして、筆者も之を讀み本縣の人口密度圖作製を思ひつき地理學評論第二卷石田學士の統計地圖に於ける階級區分に就て、人口地理學に就て及人口分布圖に就て等直接參考となりて、其等に全く模倣して作圖したのは一昨年のごとであつた圖版第五版はそのうちの一つである。自分としては何等研究をしたのではなくて只夫を作るの勞をとつたまでである。夫でも困つたことは各町村の面積の算出であつた。確な町村面積の統計が全く得られず、圖上測積によつたのであるが、本縣は要塞地帶及その附近の要地が大部で五萬分之一地形圖は島原大村兩半島の外にはなく已むなく二〇萬分之一帝國によつたのであるから不完全かも知れぬ。なほ同圖には半島離島等に村界の入れてない所もあるので一層苦

しかつたのであるが出来るだけ正確を期したのであつた。そして我々の出来る簡單な法として人口數と面積よりして單位面積に於ける密度を算出し石田學士の階級區分の法により第一圖を作つた。本縣は一〇〇より三〇〇の間の密度を有する町村最も多く即ち中位度の密度値の多き地域で最も普通の型であるから階級の幅も低位階級を廣く中位階級を狹く高位階級を廣くとつたのである。

三、人口の分布

本縣は長崎・佐世保二市を中心とするから人口もこゝに集中し二市合せて縣下總人口の四分の一を占めてゐる。其他半島・島嶼多く地形上數多の區劃に分れてゐるので自ら島原・諫早・大村・平戸・嚴原等地方的小中心が發達してゐる。一、本縣は地形地質・住民・經濟關係等の上から一一の地域に分けて考へたら好都合かと思ふ。(第二圖)各地域の人口及密度は第一の表に示し、以下各につきて略説することにする。

(1)長崎半島 長崎の附近を假に長崎半島と言

つて置くが他に適當の稱呼があればそれに従ふ山崎博士の大日本地誌、小林氏の大日本地理精義等には野母半島を長崎半島と呼ばれてゐるが地理學評論第三卷田中教授の日本の地理區、下

長崎附近は縣内の人口最も稠密なる地方で一方糶一二〇〇人縣平均の四倍であるが、大部は長崎市の中央に密集してゐるのである。輝石安山岩の丘陵起伏し殆ど平地を存しないこの區域では長崎市以外には西に小



四九

第一表 地域別人口密度表

地域	町村數	人口	面積	密度	密度順
長崎半島	二	三七・三三	一八〇・四五	一二・一〇	1
野母半島	一四	五・二三	一〇八・〇〇	四七・一三	2
西彼杵半島	一六	八二・〇七	三二・三三	二二・九	8
島原半島	二六	一五・六八	四七・二九	三二・四六	4
諫早地峽	一三	五八・〇七	一八・七	二九・五	5
大村半島	一五	六・七八	三・四八	一九・四	9
北松浦半島	三	二四・一五	六・二〇	三・八	3
平戸諸島	九	四七・四四	一〇・七二	三・二	7
五島列島	二七	一六・六九	七・六三	二・九	10
壹岐島	三	三・三三	一・三六	二・六	6
對馬島	一四	五・〇四	七・六七	七・七	11

榑・武見・北に時津・東に矢上・網場等の小舟泊地にやゝ密なる聚落があるのみで山地は甚だ人口稀薄で産業も振はぬ。

(2) 野母半島 密度は長崎半島の半にも及ばぬ

が次で稠密なる地域である。半島は基部よりも先端に南岸よりも北岸に濃密である。古い片狀の岩石から成る峻しい山地で平地は亦少い。長崎港外の第三紀層の諸島端島・二子島の炭坑には多くの人が密集してゐる。野母・樺島・脇岬・深堀・爲石には漁者が多く高濱は農業も行はれてそれ等が半島の濃密部に屬する。

(3) 西彼杵半島 準平原化したこの半島は耕地に適せず交通不便で人口稀薄である。たゞ松島崎戸の炭坑ある島では極度に多くの人が働いてゐる。

(4) 諫早地諫 大村半島より更に長崎・島原諸半島の分岐する地點附近で海水は大村灣・有明海・千々石灣の三方面より灣入し鐵路も四通し交通上の要地である。諫早野はその中心地でやゝ活氣がある。この地域には第三紀のゆるやかに起伏する若い地の上に角閃安山岩が貫き出て所々にドームや臺地をつくる。第三紀の丘陵とその間の低い沖積地が田畑に耕作せられ聚落も發達してゐる。半農半漁の橘灣沿岸諸村は一般

に住民が多い。

(5) 島原半島 密度は第四位になつてゐるが諸村通じて人口の多い半島である。温泉火山の裾野は海岸に沿ひてよく開け、南島原の玄武岩丘陵を交ゆる第三紀層地方もよく耕作されて農業の最も盛なる地方である。且近年各地に蠶業も發達し商・工・漁者も相當に分布し氣候はよく生産は豊である。東岸南岸は特に人口密で島原・加津佐は夫々その中心である。開港口之津は三池港完成以後急にさびれて今は人口激減し貿易も殆ど行はれず昔の面影を失ひ繁榮も北隣の加津佐に奪はれた。

(6) 大村半島 多良火山地域で地勢最も峻しいから人口密度も半島部最小となつてゐる。たゞし大村扇狀地のみは濃密である。徑四軒の小さい扇は礫が多いから沃地ではないが、平地の少ない地方のことゝて他所よりの移住者も入り來り荒地を拓いて畑とし、甘藷や桑が栽培せられ人口が急増加した。その間に歩兵聯隊あり近年又大村海軍航空隊も置かれて練武の地としての

特色を有し師範學校も扇の南端近くに移轉されてやや狀況を呈してゐる。

(7) 北松浦半島 軍港佐世保市は近く日宇・佐世二村を編入し人口の過半を占める。早岐は半島の基部に位し交通上の要地であるし、漁業根據地星鹿等と共に稠密である。所々玄武岩の臺地におほはれる第三紀層中には薄い炭層があるので佐世保市以北の各町村には皆幾ばくかの炭業者あり、沿岸には小規模の石炭積出港が相並んでゐて夫々活氣を添へる。志佐・佐々・相浦・早岐等諸川の流域の狹少なる沖積地には水田よく發達し、米産も縣下では多い地方であるから交通不便の地としては比較的人口が多いやうである。

(8) 島嶼部 平坦な壹岐が最も濃密で平戸・五島之に次ぎ對馬は最低で本縣の最も稀薄なる地方である。一方籽七八人といへば青森縣とほぼ同密である。これは遠く海中に隔絶して交通も不便農耕地も少く天恵の少いためであらう。

平戸・武生水・巖原・福江・富江は各諸島の中心

地、生月・小値賀等は前者と共に漁獲の根據地として何れも人口が多い。

二、各海岸別に人口の分布を見れば第二の表の如く、長崎附近沿岸と佐世保灣岸に最も密集し

第二表 海岸別人口密度表

海 岸	人 口	面 積	密 度	密度順
有 明 海 沿 岸	五・二七 ^人	二五・三 ^方	二五・三 ^人	8
島 原 海 灣 沿 岸	二〇五・六 ^四	二四・二 ^九	四六・二	3
千 々 石 灣 沿 岸	八〇・五〇	二五・〇 ^五	三二・六	4
長 崎 附 近 沿 岸	二八・二六	一〇・六 ^四	二七〇・九	1
西 彼 半 島 外 目 沿 岸	六・七二	三三・四 ^三	二七四・七	5
大 村 灣 沿 岸	九・八〇 ^五	四七・〇 ^七	一九五・二	9
佐 世 保 灣 沿 岸	二二・六九 ^三	二〇・七 ^七	一一六・七	2
北 松 浦 半 島 西 岸	四〇・六三 ^三	一八・四・三 ^七	二一九・七	7
同 北 岸	二〇・四六 ^三	八・〇 ^〇	二五三・八	6

縣總人口の三分の一はこの兩沿岸の諸市町村に住してゐる。兩者とも面積はほど等しいが前は

後の二倍半の人口を擁してゐる。これ佐世保は單に軍港のための新興地たるに反し、長崎は商港としての歴史を有し、工業地として又水産根據地としてのその發達の原因が單一でないからであらう。

島原海灣・千々石灣沿岸等南東部海岸には比較的人口が多いのは位置・地形勝れ對岸に熊本・天草方面を有し各種産業も發達してゐるからであらう。半島部でも島嶼部でも人口稠密地と漁業者の分布とが一致してゐる。やはり本縣は水産縣である。

三、鐵道の敷設は人口集中の或は原因となり或は結果である。何れにしても鐵道沿線は其他に比して多くの場合人口密である。本縣内に於ても次の如く兩者には數倍の差がある。

人 口 而 積 人口密度

鐵道沿線諸市町村

七六・四九^人 二二・三三^方 三六七・七

其

他

四七・四五^人 二二・七〇^方 二〇六・九

而して鐵道沿線地方は人口増加し、然らざる地方は減少しつつあるものが多いことは別圖

の如くである。

第三表 鐵道別沿線人口密度表

鐵道沿線	人口	面積	密度	密度順
省線(長崎、佐世保)	三六・〇四三	四六・七一	八三・七	2
島原鐵道	九四・〇六六	一四・五	三六・七	4
口之津鐵道	九・三三	一・〇〇・一〇	四三・三	3
溫泉・小濱鐵道	一九・八六六	八・三	二四・三	5
佐世保鐵道	三四・七三四	三七・七	九七・五	1

第三の表により各鐵道別沿線の密度を見るに佐世保鐵道が第一であるが、短距離沿線數ヶ村に佐世保市を入れてあるから主たる目的は奥地の石炭積出にある。總じて省線沿線は私鐵沿線よりも割合に人口が多い。溫泉鐵道、小濱鐵道は幹線と溫泉岳を連結する特別の目的があるので人口の少い地方を通じてゐる。

四、男女の割合

本縣は通じて女一〇〇人に對して男一〇四人となるから我國の平均女一〇〇人につき男一〇

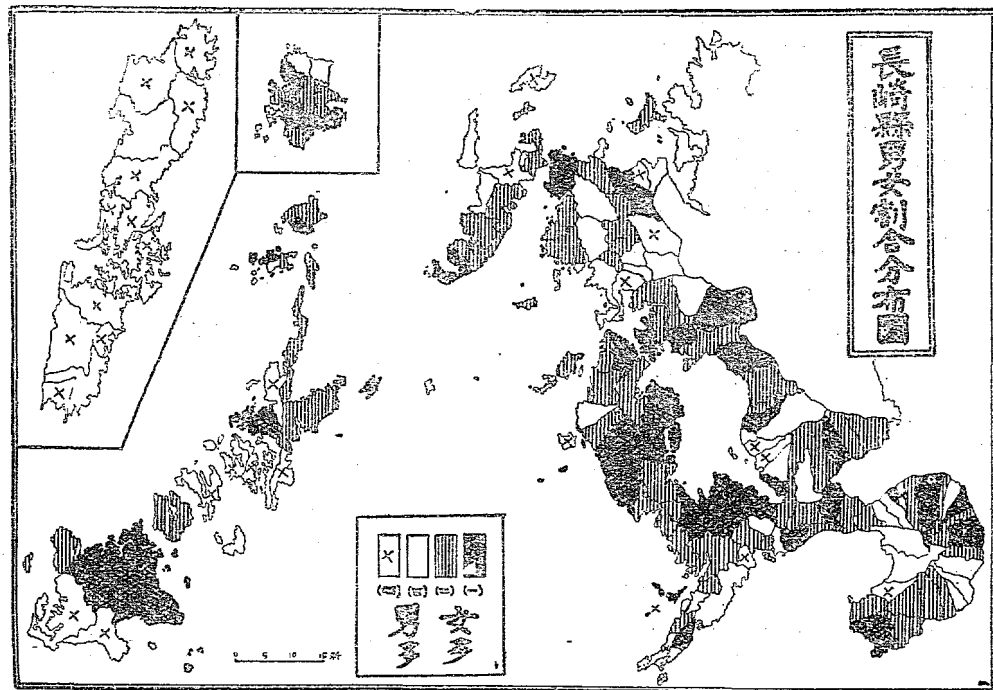
長崎縣の人口分布

一人よりも男が多いのであるが、一九二個の市町村中男よりも女の多きものが一二〇もある。即ち町村數の三分の二は女が多く、又その半數五五個町村は女一〇〇人につき男九五人以下である。男が一〇五人以上の割合の町村は三七個あるのみであるから男よりも女が多い地方が遙に多いのである。

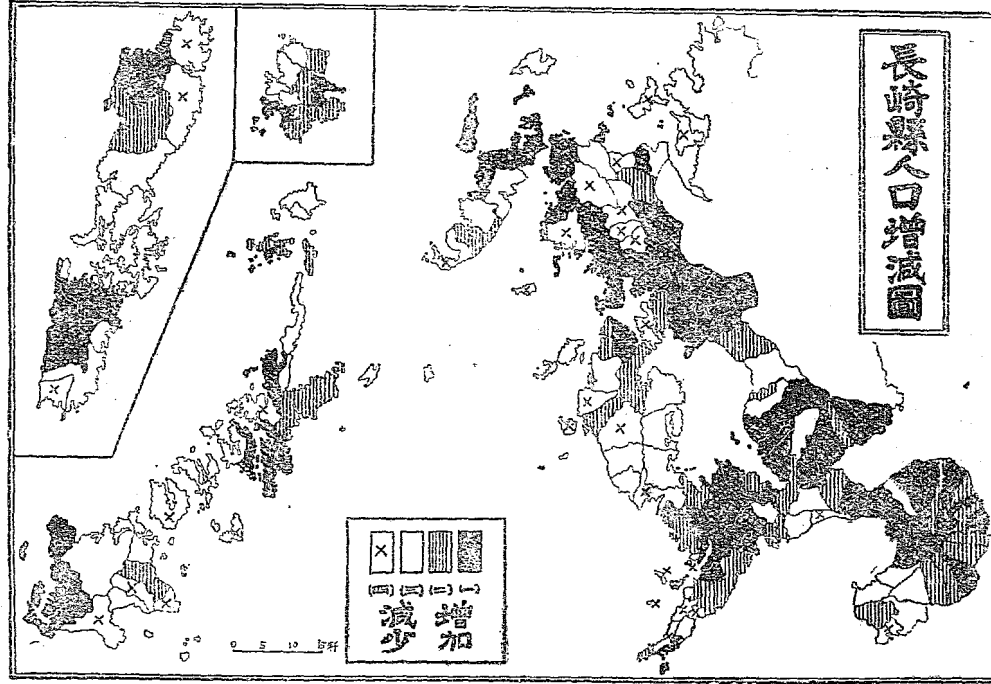
第三圖は男女の割合の分布を示したものである。女多き地方は長崎半島・西彼杵半島・大村灣口附近・壹岐島・福江島の大部等で諫早地峽・島原半島もその部に入る。男の多いのは野母半島先端部・大村附近・五島の大部・對馬全部である。特に對馬は上下二島ともに擧つて男の割合が非常に多い。炭業地(高島・松島・崎戸)軍事的施設地(佐世保・大村附近)及漁村(野母附近・北松浦半島北岸・五島列島・壹岐・對馬)は大體に男多く、長崎・西彼杵兩半島では人口稀少なる村に女が多い。

五、人口の増減

圖 三 第



第 四 圖



長崎縣の人口分布

大正九年第一回の國勢調査と、大正十四年第二回のとの人口を比較すれば我内地では三七七萬人増加し、その割合は一〇〇〇人につき六七人であるが、本縣は僅に三萬足らずの増加その割合二四人である。それ故本縣は文化地域の稠密部であるといつても東京・大阪又は福岡の如く著しく發展せる地方ではない。九州に於ても佐賀と共に増加率の最低地方である。生氣の乏しいことはこの一現象だけでも察せられる。特に長崎市にては大正十四年には市役所調査の現住人口よりは實際の在住人口が八萬以上も少かつたといふことは近年の衰運の如何に甚だしきかを示してゐるものであると思ふ。

各地方の増減狀況は第四圖の如く縣平均以上に増した地方は長崎・大村・島原三半島と佐世保

平戸附近である。總じて人口密度高き地域は増加率も大であるが、西彼杵半島及多くの離島の如く人口稀少なる地方は減少してゐる。商工業地は増加し石炭業地は打つゞく不況のため著しく減少した。又女多き村はたいてい減少してゐるのもおもしろい現象である。

人口増加ははか／＼しくないがそれでも増加した町村は一一、減少した町村の八一よりも三〇多く、縣平均増加以上の増加率を有するものが七四。一〇〇〇人につき五〇人以上減少した町村はその半數足らずの三三にとゞまつてゐる。

以上はほんの概略であるが人口に關する分布圖の簡單な解説としてをく。